

#### [臨床心理教育研究領域]

#### Imaginary Companionの精神的支援について：心の支えとしてのイメージ

荒沢 恵夢

本研究は人が人に対して行うと思われがちな精神的支援を、イメージが行うという、Imaginary Companion現象に焦点を当てたものである。このImaginary Companionは子どもから大人まで幅広い年齢層において見られる。本研究において関心がおかれたのは、①日本における子どものImaginary Companion出現率はどのくらいか、②このImaginary Companionはこれを持つ子どもの保護者にどのように捉えられているのか、③Imaginary Companionを持つことと関連のある個人的要因はどのようなものか、④Imaginary Companionの精神的支援の形態はこれを持つ年齢の影響を受けるか、の4点である。

これらを明らかにするために、①子ども対象としたインタビュー調査、②母親を対象としたインタビュー調査、③大学生を対象としたイメージの鮮明度や解離性傾向、創造性についての質問紙調査、④大学生を対象とした精神的支援についてのインタビュー調査を行った。

調査の結果、児童において純粋なImaginary Companionを持っていたのは4.8%に満たなかったが、Personified Objectを含めて考えた出現率は26.2%であった。調査対象となった子どもの約4分の1が、イメージの中の人格とコミュニケーションをとって遊んでいることが明らかになった。このような高い割合でImaginary Companionやこれに類似するPersonified Objectが子どもに所有されているにもかかわらず、母親のImaginary Companion現象についての捉え方は否定的なものが大部分であった。また、Imaginary Companionを持った経験がある者と、Personified Objectを持ったことのある者、どちらも持ったことがない者との間にイメージの鮮明さについて差は認められず、Imaginary CompanionやPersonified Objectを持つことにイメージを想起する際の鮮明性は関わりがないことが明らかになった。さらに、解離傾向と創造的想像のタイプは、Imaginary CompanionやPersonified Objectの有無に関連がないことが明らかになった。精神的支援についての調査結果、Imaginary Companionのもたらす精神的な支援というものは、年齢によっても多少の変化は認められるが、それが出現することとなった基盤に大きく左右されることが示唆された。

#### 乳児の泣き行動における発達変化：保育所での六ヶ月にわたる縦断観察を通じて

大島 希

乳児の泣き研究は新生児・乳児の声の音響的特徴から病態を探索する研究が進められてきた。研究の蓄積により泣き声から原因が程度推定できることや中枢神経系障害や先天性異常により泣き声が違うことが予測可能とされている。また、泣きの行動的特徴の検討から月齢でその形態や機能が変化することがみだされている。本研究では、乳児保育を実施している保育園で5月～11月まで2名の乳児を対象に2週間1回の

間隔でビデオとレコーダーの記録と自然観察をした。保育園での観察を通じてみいだされた泣き行動の頻度と持続時間の特徴を発達検査による心的機能の変化や身体的変化に伴いどのように変化するかを検討した。その結果、月齢の経過に伴い泣きの頻度・平均持続時間が減少していく傾向が示された。これは、泣きとむずかりの分化による使用形態の選択や経験・学習にともなう泣きの意図性の上昇を示していると考えられる。本研究の乳児保育における臨床心理学的意義は、乳児の関係性を示す行動の検討を通じて乳児の豊かな心的発達をみる視点や乳児と環境との関係性に表れてくる意味について考える示唆をあたえてくれたものと考えられる。

#### Solution-Focused Approachにおける「初回面接公式課題」の機能について

佐々木千尋

本研究で取り上げるSolution-Focused Approachは、Brief Therapyのモデルの1つであり、医療・教育場面をはじめ、さまざまな現場での臨床実践において有効性が多く報告されている。特徴としては、クライアントの問題やその原因の把握ではなく彼らの肯定的な側面に注目し、問題の解消ではなくクライアントが望む解決の構築を目指す。「初回面接公式課題」はその過程でクライアントが望むものが明確でない場合に用いられる観察課題の1つで、日常の出来事から「今後も起こってほしいこと」に注目するよう促す。この課題によって生活の中の問題点ではなく好ましいことについて予期的に注意を向けることになり、多くの場合好ましい出来事と具体的な変化が報告され、それは解決に向けての重要な指標とされる。代表的な課題の1つであり、最も一般的で安全であることや応用性についても示唆されるこの課題についての研究はいくつかあるものの、課題を用いた場合の治療効果への影響に関するもので、課題への反応過程や機能について十分に検討されているものは見られない。よって本研究では、この「初回面接公式課題」について、いくつかの面から検討を試みた。

はじめに、課題による予期的な観察が出来事の報告に与える影響に関して調査を行った。課題の応用的方法を用いて肯定的出来事を想起した場合と観察してきた場合の報告について面接による調査を行った。その結果、観察によって出来事の報告数が増加するというより、むしろ小さいことに注意を払うようになることが示唆された。次に、この課題が望む方向（目標）の明確化や状況の改善にどのような影響を与えるかについて、課題の有無による2群を設定し、目標に関しての主観的变化、認知面での変化について評価尺度を用いて質問紙調査及び面接による調査を行った。肯定的出来事の報告数は課題がある場合に多い傾向が見られ、記述が詳細であったが、その他のついて明確な差異や変化は見られなかった。これらのことについては今回の調査方法等について検討すべき点が多いと考ええる。

実際の面接においても、観察によって認識された肯定的出来事がすぐさま現状についての評価を上げるといような単純なことではないだろうが、より小さなところに注目して報告されることが示唆されたその内

容については、クライアントの重要な資源として活かされるべきものであろう。

#### 教員のストレスとその対処の質的研究：中学教師の語りより

佐々木 誠

本研究は、「教師がストレスと対処をどのように経験するか」を明らかにするために、岩手県下の公立中学校教員31名の語り(narrative data)について解釈学的現象学的分析(interpretative phenomenological analysis)に準じた方法で分析を行ったものである。具体的には、面接内容を書き起こしたテキストを、内容のまとまりであるセクションに分け、それぞれにその表象している内容を表すラベルを付けていき、それらをさらに本質的な何かをとらえた内容ごとにまとめていくことを繰り返していった。その結果、以下の点が明らかになった。1) 対処機能の本体である「一次資源」、その背景にある「二次資源」、ストレスの本体である「直接要因」、その母体である「危機的要因」、ストレスの結果である「態度変化」と「情緒変化」の6要因群が確認された。2) これらの要因群を構成する具体的内容と他の要因群との関係を検討した結果、教師は自分の実践が「ゆらぐ」感じを持ったり、また、子どもやその親、あるいは同僚など、周囲にいる職務上関わる他人と「つながらない」とか、職務遂行上でどうしたらよいかわからないと感じた際に、ストレスを感じるといえる。3) 具体的には、要因群の1つである「一次資源」を構成する「対処資源」「目的資源」「エネルギー資源」の3つを低下させるような働きがこの背景にあると考えられる。4) 対処についても、それを手段としてだけでなく、さらに目的や感情をエネルギーとする見方を加え、プロセス的なものが教師の力量を高める働きをすることが示唆された。5) さらにバーンアウトについては、脅威がバーンアウトに直結するのではなく、対処のあり方との関係でそれが生じると考えられる。おそらくは、対処方略の決定からその実行に移る段階で必要とされる「目的資源」と「エネルギー資源」が弱体化していることが、バーンアウトにつながるのであろう。

#### 警察の被害者支援における支援者側のストレスに関する研究

佐藤 敦

警察職員に対しMBI尺度(Maslach Burnout Inventory)を用いてバーンアウトを測定した。結果を「女性」「交通」「刑事」にわけて比較したところ、「交通」課員が最も高いバーンアウト症状を示した。これは交通警察業務の対象が偶発性の高い交通事故であること、それに伴う被害者とのやり取りが時に示談交渉等の利権に絡むものであること、従って純粋に「被害者支援」の対象として関わるには困難が伴うものであることが理由として考えられた。

MBI下位尺度は3因子構造を示し、「情緒的消耗感」と「脱人格化」との間に正の相関、「脱人格化」と「個人的達成感」との間に負の相関が見られた。MBIは「情緒的消耗感」と「脱人格化」とが相互作用し、「脱人格化」の増大が「個人的達成感」を低下さ

せるという因果関係の存在が示唆された。しかし、本研究におけるモデルの適合度指標は十分な値に届かず、他のモデルの適合度との差も小さいことから、MBIモデルの安定性は低いものと思われた。

「被害者支援ストレス」の自由回答内容を整理すると、「女性」は被害者支援の枠組みに乗った上でのストレスを指摘するのに対し、「交通」と「刑事」は支援することそれ自体をストレスとして指摘する傾向が見られた。

「役割葛藤」を引き起こすものとして、被害者支援と捜査を同時に行うのは、「役割葛藤」を引き起こすものであること、被害者支援はどこまでやるのが明確にされていないこと(役割の曖昧さ)等の「役割ストレス」が見られた。特に「役割葛藤」において、被害者支援でストレスを受けた支援者に対する叱咤激励が、結果的に二次的被害を与えた例が見られた。これは精神的強さを求められる警察業務と、傷つきやすさを被害者への共感として活用する被害者支援業務との相反性と考えられた。

バーンアウト低減のためには「役割ストレス」を低減させるため、スタッフへの仕事の割り当てや被害者支援の範囲を明確にする等のガイドライン整備が必要であると思われる。

#### Ambiguous function assignmentsの意味づけに関する研究

浜渡 千春

Ambiguous function assignment (以下AFAS) とはLankton et al. (1986) によってEnchantment and Intervention in Family Therapyで提唱された「曖昧さ」を伴う面接課題である。これまでは、この課題の有効性は経験的に示されているが、実証データによって確認されていない。本研究の目的は、第一に、AFASのメカニズムを検討することを通して、その有効性を確認することである。第二の目的は、AFASでの「曖昧さ」が持つ肯定的な側面の考察で、この点もこれまではよく検討されていない。男女の大学生15名にAFASを実施し、その内容について収集した面接資料を書き起こして分析することで、この2点を検討した。

この課題を用いることで、「自己について深く考える」「モチベーションが高まる」「新しいことや刺激を発見する」「課題自体が新しい行動のきっかけとなる」などの効果がみられた。また、意味づけに影響を与える要因は、「期待」「義務」「作業に集中する」「具体化・探索の有無」などが考えられた。こうした分析をもとに、AFASでの意味づけのプロセスについてのモデルを作成した。

AFASの「曖昧さ」がもつ意義としては、クライアントがこの課題の「曖昧さ」に自分なりの意味を付与し、面接者はそこからクライアントを理解し、介入するための手がかりが得られるのではないと思われる。治療儀礼との関係では、AFASは期待を高め、ブラシーボ要因を高めることで、クライアント自身の力を引き出すことを狙った課題であると推測された。またこの際、課題を提示するまでの文脈、期待や希望の要因も重要であることが指摘できよう。